

埋文にいがた

No. 43
2003. 7. 25

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

今年度の発掘調査現場の紹介

たにのうえ だい うえ 峪ノ上遺跡・台の上遺跡 (上越市大字木島字峪ノ上107、同52)

峪ノ上遺跡・台の上遺跡は、上越市の南端、新井市と板倉町の境界にほど近い段丘上に立地しています。近くには国道18号線が通り、関川と矢代川が遺跡の東と西に流れています。遺跡の調査は北陸新幹線の建設に伴うもので、奈良～平安時代の須恵器や土師器などが出土しました。

遺跡は周辺の水田よりも一段高くなっていることから、遺跡のある場所は「崖の上」と呼ばれ、器のかけらが拾える場所として以前から知られていたそうです。



発掘調査風景（台の上遺跡）



土器出土状況（台の上遺跡）

検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟以上、竪穴住居状跡1基、井戸1基、溝数条などで、規模は不明ながらも古代の集落跡と考えられます。

古代の役所跡と推定されている今池遺跡群や越後国分寺説のある本長者原廃寺にほど近いことから、頸城平野の古代史を紐解くうえでの貴重な資料が得られました。両遺跡ともに6月末に調査を完了しました。この後、五反田遺跡（板倉町）へ移動し、11月まで調査を行います。（渡邊裕之）



掘立柱建物跡（台の上遺跡）

ひがしはらまち
東原町遺跡
 (柏崎市東原町字下原19-1ほか)

東原町遺跡の発掘調査は一般国道8号柏崎バイパスの建設に関連して行っています。遺跡は柏崎平野の北端、鯖石川と別山川の合流地点の約500メートル下流に位置しています。遺跡は鯖石川左岸の自然堤防上から西に広がる沖積低地にかけての緩斜面に立地しています。調査予定面積は13,000㎡です。調査区全体では上層、下層の2枚の遺物包含層が確認されています。上層は14世紀から江戸時代まで、下層は13世紀を中心とする時代です。

発掘調査は4月から11月までを予定しています。現在、全体の約5分の一の調査が終わりました。調査区の北側では、江戸時代の樽の中に寛永通宝などの古銭が納められた墓とみられる遺構や、古銭を納めた中世の珠洲焼の壺を埋納した遺構などが検出されています。また中世の土師質土器の皿が多数廃棄された土器溜まりも検出されています。

古銭を納めたこの壺は調査区の北側、豊田橋近くの道路付近の調査区内で出土しました。そばには掘建柱建物や東から西へ流れる川跡も検出されています。壺は円形の土坑にほぼ正立した状態で埋められていました。土坑の大きさは直径、深さともに約50cmです。壺は口径20cm、胴部の最大径、器高ともに30cmです。壺の口には木のふたがかぶせてあり、内側には口縁形にあわせて溝を切った跡がありました。中にはひもを通した古銭がぎっしりと詰まっていた。壺の大きさや今までの出土例から1万から1万5千枚ほどの古銭が入っているものと推定されます。

また、半截された樽を埋設した遺構には銭のほか人の歯、木の鋏(先端部を墨塗りし、刃としたもの。祭祀用)、数珠なども出土しました。

中世から近世のこの地域の様子が少しでも解明されるように調査をしていきたいと思ひます。(山本 肇)



A区調査風景



半截樽埋設遺構



埋納銭出土状況



中世(約800年前)の土器溜まりの検出状況

しもわり 下割遺跡

(上越市米岡字下割 1,205 ほか)

下割遺跡は高田平野のほぼ中央、上越市大字米岡字下割に位置しています。上越三和道路建設にともない昨年からは継続して調査をしています。今年度は古墳時代と中世の調査を行っており、古墳時代の調査区をA地区、中世の調査区をB地区と呼んでいます。

A地区は昨年中世の調査を行った地区になります。そのA地区では、土坑や溝、昔の飯田川と思われる河川跡などが確認されました。これらの土坑や溝からは古墳時代前期から中期の土器が出土しています。また、河川跡からも同じ時期の土器が出土していますので、古墳時代には遺跡の中を飯田川が流れていたようです。

B地区では多くの柱穴が確認されており、昨年調査した集落の連続部分であることがわかります。遺物は少量ですが珠洲焼などが出土しています。今後、古墳時代や中世の集落の形態を確認すべく調査を進めていきます。

(山崎忠良)

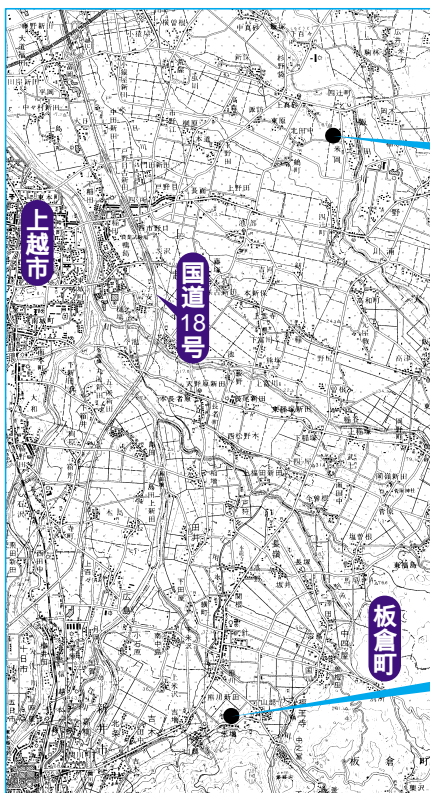


土坑の調査風景



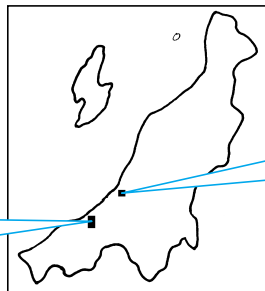
遺物出土状況

調査中の遺跡の位置



国土地理院 高田西部

下割遺跡



五反田遺跡

中頸城郡板倉町
大字米増字五反田 44 ほか

東原町遺跡



国土地理院 柏崎

東原町、下割遺跡は現在も調査中です。現場のおよその位置は地図のとおりです。詳しい位置等のお問い合わせは、当事業団までお願いいたします。

このほか、国道17号六日町バイパス建設に関連して余川中道遺跡の調査を7月上旬から開始しました。10月末で調査を終了する予定です。現場の紹介は五反田遺跡と併せて次号でお知らせいたします。

平成15年度整理作業・試掘確認調査一覧

〔整理作業〕

遺跡名	所在地	関連事業	主な時代(時期)	種別
あおた 青田遺跡	北蒲原郡加治川村大字金塚字青田	日本海東北自動車道	縄文	集落跡
よしがさわ 吉ヶ沢遺跡	東蒲原郡三川村大字上戸谷渡	磐越自動車道	旧石器、縄文	散布地
きたの 北野遺跡	東蒲原郡上川村大字九島字長木	磐越自動車道	縄文	集落跡
おのざわにし 小野沢西遺跡	中頸城郡妙高村大字関山字小野沢西	上信越自動車道	弥生～古墳	散布地
はつとまきはら 八斗蒔原遺跡	中頸城郡中郷村大字板橋新田字八斗蒔原	上信越自動車道	縄文	散布地
まえはら 前原遺跡	中頸城郡中郷村大字西福田新田字前原	上信越自動車道	縄文	集落跡
まるやま 丸山遺跡	中頸城郡中郷村大字岡沢字汐下	上信越自動車道	縄文	散布地
がんざわ 蟹沢遺跡	上越市大字滝寺字蟹沢	上信越自動車道	近世	散布地
どうかんばやし 道灌林遺跡	新井市大字志字道灌	上信越自動車道	縄文	散布地

〔試掘・確認調査〕

日本海沿岸東北自動車道関係では、中条IC～村上ICの間で試掘・確認調査を行います。
 国道関係では、上越三和道路、糸魚川バイパスなど計8路線で試掘・確認調査を行います。
 北陸新幹線関係では糸魚川市、板倉町、青海町で試掘・確認調査を行います。

平成15年度の普及・啓発事業

今年度の普及啓発に関連した事業は次の通りです。

1 現地説明会、発掘調査報告会

今年度もたくさんの方々の方に現地説明会に参加していただきたいと願っております。日時等が決まり次第当事業団のホームページ(<http://www.maibun.net>)でお知らせいたします。また、発掘調査報告会は来年の3月上旬に上越市を会場に行う予定です。

2 各種刊行物の発行、ホームページ

事業団の活動、研究内容を紹介するために『埋文にいがた』『年報』などを発行します。また、ホームページをご覧いただくと最新の事業団の情報が分かります。是非、ご覧ください。

3 展示室の管理、運営

常設の展示室では9月下旬に青田遺跡の独木舟を展示する予定です。エントランスホールの展示コーナーでは昨年度調査の出土品を展示しています。



現地説明会（浦廻遺跡）



展示室



五丁歩遺跡出土土器

本物と出会う

- 埋蔵文化財センターでの校外学習 -

本物と出会う...埋蔵文化財センターには、県内の高速道路、国道バイパス、新幹線の工事範囲から出土した土器、石器、木器等が多数展示されています。約2万年前の石器、1万2千年前の縄文土器から近世までの本物の出土品を児童・生徒のみなさんが間近に見ることができます。また、火おこし、土器づくり、黒曜石での肉・野菜切り、土器による煮炊き、文様付け等の体験学習をする事も可能です。

社会科、総合的な学習の時間等における興味・関心を高めるための時間として、学習を振り返るまとめの時間として、また、近隣の施設等を含めた校外学習の場としてご活用ください。以下に先生方からよく質問のある事項についてQ & Aの形式でまとめてみました。

センターではどんな体験活動、見学等ができるのですか

現在、センターでできる体験活動、見学等は以下の通りです。

- 1 火おこし活動（舞ギリ式、キリモミ式）
- 2 はく片石器による肉、野菜等を切る活動
- 3 土器の製作
- 4 土器の文様付け
- 5 土器による煮炊き（擬似縄文土器の使用）
- 6 縄文時代～江戸時代までの土器、石器、木器等の見学、観察

このほか、発掘調査を紹介したVTR、発掘用具等も用意してあります。

インターネットのホームページでも活動の様子を紹介してあります。



五丁歩遺跡出土石器

センターを利用するにはどんな手続きが必要ですか

- 1 まず、センターへ電話をして下さい。その際に、希望日時、およその活動の様子をお知らせ下さい。
- 2 次に、実施日の2週間前までにセンターで打ち合わせをします。
- 3 依頼書、計画書を提出して下さい。

打ち合わせは必ずしなければならないのですか

遠隔地を除いては打ち合わせを必ずして下さい。利用方針として、先生方が主体となってセンターで授業を行っていただくこととしています。先生方が体験活動を指導し、職員は補助的な立場で支援します。また、センターの展示物の一部は毎年更新されていますので、見学・観察の説明につきましては要請に応じて職員が行います。これらのことを踏まえての活動の組み立てが必要となりますのでよろしくお願い致します。

4月と5月初旬は予約がいっぱいで利用できませんが、いい方法はありませんか

この時期に利用が集中しますが、以下のような考えで計画を立てられてはいかがでしょうか。

- 1 4月と5月初旬は歴史に対して興味・関心を持つための体験活動として
- 2 それ以後は「学習のまとめ」のための見学、体験活動として
- 3 植物園、美術館、石油の里等を含めた新津丘陵を中心とした「総合的な学習の時間」としての利用
- 4 近くにある地層見学、八幡山遺跡と組み合わせた利用

教職員が研修の場として使用したいのですができますか

研修を通して先生方から指導技術・知識を身につけていただくことは、次代を担う子供たちに埋蔵文化財への理解と愛情を育むことにつながると考えております。是非、ご利用下さい。（業務に支障のない範囲で協力させていただきますので、早目にご連絡下さい。）



五丁歩遺跡出土土器

連載企画・にいがたの文字資料から 第5回

「地域の特色を見る」 - 上越 -

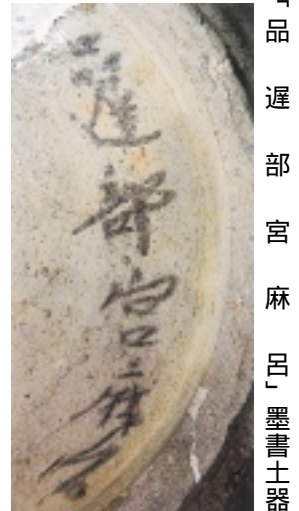
2003年度は新潟県に関する文字資料を使って、県内4地域の古代における特色を記したいと思ます。新潟県は上・中・下越・佐渡の4つの地域に分けられ、それぞれ歴史的・地理的な特色を持っています。この特色について、遺物に書かれた文字を通じて考えていきたいと思ます。

関川を中心とする上越地方は越後古代史の中でも部民といわれる一般農民の資料が多く見られます。一定の地域にいる人々がまとめられ、苗字のように同じ呼称（部民名）を名乗っていた集団を部民といいます。名称が時期ごとにわずかに異なり、特に上越では古い部民名を書いた墨書土器が見受けられます。その一つが、柿崎町木崎山遺跡から出土したものです（写真）。ここは現在柿崎ICとなった遺跡で、その建設に伴う調査で出土しました。約1,100年前につくられた土器に書かれ、宮麻呂が個人の名前、品遅部が部民名となります。“ほむちべ”または“ほんちべ”と読み、「品」をホンというような読みにくさからも、ほど遠い古代の薫りがします。品遅部と名のつた人々は古代の日本ならどこにでもいたのではなく、越後の他には越中富山から周防山口までの本州域しかいない限られた集団だったのです。畿内を中心とするこの部民集団の広がり。そして、私たちには違和感を感じさせる読み方。これらのことから上越地方が大和政権の勢力範囲と近く、早くから中央・畿内と交流をもつ地域であったのではないかと考えられるのです。

西日本で多く見られる高地性集落が裏山遺跡で発見されるなど、近年の上越地域での調査成果からも畿内に近い文化圏であったことが判明しつつあります。一方、歴史書にもこうした特色が垣間見られます。例えば、最古の歴史書である『古事記』『日本書紀』には、畿内から派遣されたヤマトタケルノミコト（日本武尊）が東国を征服する伝説があります。この中で、彼は信濃の次に越後に立寄ったとされ、おそらくこの越後とは長野に近い上越のことと考えられています。また大和政権に任命された地方官で、各地域を統治した国造という地方豪族の存在を物語る資料（写真）からも確認されるのです。越後の古代というと、淳足・磐舟柵という軍事施設やそれを拠点に制圧された反畿内勢力の地域と描かれがちですが、それ以前から畿内と密接な関係を持っていた地域もあったのです。そうした伝統的な関係を背景として、上越地方には国府・国分寺が置かれ、上杉氏が去るまでの長期間、越後の中心地として栄えたのです。それ故、古代には北陸の他の地方と同様、東大寺をはじめ中央の大寺院が地域の開発を担ってやって来ました。その結果、大寺院がもつ先進技術や莫大な労働力が投入されて、国府とともに開発が進み、益々発展していったのです。

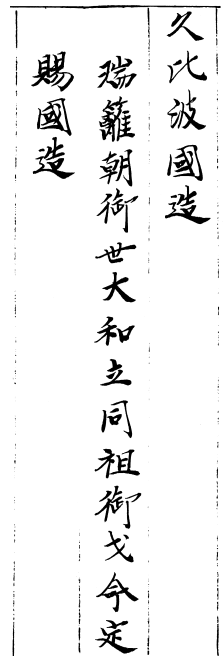
このように1点の部民の墨書土器から、周辺の調査成果や歴史書に見る内容を考え合わせ総合的に上越の歴史を見ることで、他地域に見られない越後の特徴が浮かび上がってきます。例えば、昨年度の板倉町仲田遺跡の調査では郡の下の行政組織かもしれない「里」と書かれた墨書土器が県内では初めて出土しました（写真）。上越では今後、新たな事実や特色が明らかになることでしょう。

「久比波」の「波」は鎌田純一氏の「先代舊事本紀の研究」（吉川弘文館 1960）に従い、「岐」と解した。



柿崎町木崎山遺跡

写真

天理大学附属天理図書館蔵
善本叢書 和書之部 第四十一卷 先代舊事本紀 卷第十

写真



写真

「里」墨書土器
（板倉町仲田遺跡）

埋文コラム「発掘から見えてきた履物の歴史」

下駄

日本での下駄の出現は、4・5世紀とされています。古墳から滑石製模造品の一つとして下駄が出土することから、下駄は祭祀品として扱われていたと考えられます。平安時代後期から室町時代にかけて制作された絵巻物に、井戸端や便所にいる人々、また僧侶が下駄を履く姿が見られます。当時、井戸端や便所が聖なる場として考えられていたからでしょう。日常生活の場では、下駄を履く人物はほとんどみられません。下駄が日常的に使用されるようになったのは、都市部でも江戸時代の中頃になってからです。和島村大武遺跡の中世の層からは下駄が13点出土しています。台座と歯を1木から作った「連歯下駄」。台座と歯を別木で作し、結合した「差歯下駄」。また、歯がない「無歯下駄」というものもあります。写真の白根市浦廻遺跡（鎌倉時代後期）から出土した差歯下駄は前歯が残存しており、台座がモクレン種、歯がスギという別の樹種で製作されています。破損した歯をすげ替えたもののでしょうか。



手前：無歯下駄/奥：連歯下駄(大武遺跡)



差歯下駄(浦廻遺跡)

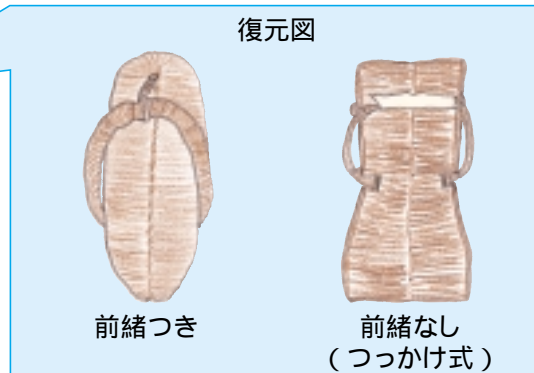
草履芯

「草鞋」は律令体制成立にともなって導入された履物のうち下級官人が履いていた「鞋」という履物の一種です。藁やいぐさなどの植物繊維で作製されました。草鞋についている足首を縛る紐を簡略化し、「草履」が成立したと考えられています。各種文献や絵巻物から平安時代中頃には、草鞋や草履が一般庶民の履物として普及したことが分かっています。驚いたことに、馬や牛にも蹄鉄の代わりに、専用のわらじを履かせていたようです。また、足半という足の半分しかない草履が活躍したこともありました。ぬかるみでも滑らず、ハネが上がらない、また軽くて動きやすいということから、農村部で近年まで利用されていました。前述した浦廻遺跡からは草履芯が出土しています。草履の芯になる薄板で、この薄板を藁などで編み込み作製したと考えられています。左右対称に、切り出した板2枚で片足分になります。同様のものが新津市上浦遺跡（奈良・平安時代）からも出土しています。但し、藁などの植物繊維は地中では遺存しにくいこともあって、その形状はまだ明らかにはなっていません。この草履芯が活躍していたころの姿を想像してみたいかがでしょうか。

(今野明子)

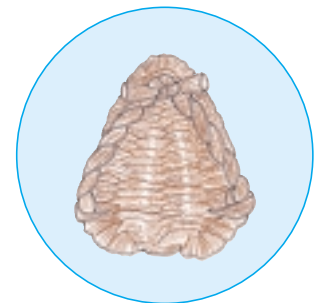


草履芯(浦廻遺跡)



前緒つき

前緒なし
(つっかけ式)



足半

参考文献 「ものと人間の文化史 104 下駄 神のはきもの」法政大学出版局 秋田裕毅 2002

県内の遺跡・遺物 41

五丁歩遺跡の出土品（平成13年 県指定）

遺跡所在地：南魚沼郡塩沢町大字舞子字五丁歩2,056ほか

五丁歩遺跡は、湯沢方面から北へ流れる魚野川の右岸、飯土山麓に広がる火砕流によってできた台地緩斜面の先端部に位置しています。関越自動車道の建設に際し昭和58・59年に発掘調査が行われ、縄文時代中期前半（今から約4,500年前）の集落遺跡が発見され、外縁径約60mに及ぶ環状集落の構造が明らかになりました。

集落は、竪穴住居跡、墓、広場、土坑等で構成されています。竪穴住居跡が外側を囲むように巡り、内側には墓があります。そして、中央は広場になっています。

出土した土器の多くは群馬県山間部や長野県の土器と類似したものが多く、上信地方との交流の深さを知ることができます。その一方で、県内に一般的にみられる東北系、北陸系土器の割合は低いです。土器文様をさらに観察すると上信地方系の文様要素はうかがえるものの、本遺跡独特の文様構成をなすものが多く、当時の人々は、各地との交流を保ちながら、独自の文様を生み出したものと理解されます。

石器は県内の他遺跡とは異なり板状石器や砥石、打製石斧や磨石類が多量に出土しました。特に出土量の多い板状石器は、裏面に擦られたような使用痕が見られ、植物繊維加工具の可能性を指摘されています。また、魚沼地方に分布の中心を持つ片刃打製石斧も出土しています。

このように出土遺物は特徴ある内容を持ち、新潟県の縄文文化を知る上で極めて重要な資料であることから、出土品（1,394点）は平成13年3月に新潟県指定文化財（有形文化財 考古資料）に指定されました。



五丁歩遺跡出土石器



五丁歩遺跡出土土器

埋文にいがたNo. 43

発行（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

e-mail: niigata@maibun.net URL: <http://www.maibun.net>

印刷 新高速印刷(株)